

『百物語評判』と医学

寺 敬 子

はじめに

『百物語評判』【貞享三（一六八六）年刊】の作者である山岡元隣は、俳人であり、儒者であると同時に医師でもあった。『百物語評判』は元隣の語る怪異への「評判」を収録した怪談集であるが、本稿はこの「評判」への医学の影響を考察することを目的とする。

『百物語評判』には、元隣と医との接点について、元隣本人の語る「医術卜筮種樹相牛の事まで殆んどさとし」（巻五第八「而愠斎の事并此草紙の外題の事」という一文があるのみで、それ以上詳しい記述は見られない。しかし元隣著の俳文集『宝蔵』の後序には、元隣と医の出会いが詳細に語られている。以下がその箇所である。

一日濃州之太守来洛時、侍医啓迪院之高第（※筆者注……原文ママ）春庵主隣之家初値如舊識。清談之暇謂隣曰、子也學幾通乎諸事略達乎萬然未及醫非缺乎。於我學焉。於是客濃州學醫三年不知肉味、頗受其家傳。

この後序は元隣の子山岡元恕によるもので信憑性が高いと考えられるものであるが、これによれば、元隣と医学との

接点は濃州太守の侍医「春庵」との出会いによってもたらされたものだという。濃州の儒医「春庵」が、藩主の上洛に随って京都を訪れた。その際に春庵が元隣に滞在したことから両者の交流が生まれ、その後元隣は三年に及ぶ美濃遊学を得てその家伝を受けたのだという。これら元隣の経歴については、榎坂浩尚氏に詳細なご論考がある⁽¹⁾。

まず近世の医学おまかな状況を押さえておきたい。近世の医学の元流は、室町時代の医師田代三喜が明に留学し、当時の中国でもっぱら行われていた「李朱医学」を本朝に持ち帰ったことに始まる。李朱医学とは金・元の時代（一一五一～一三六七年）の医師、李東垣・朱丹溪の流れをくむ医学である。宋時代は陰陽五行をもつて万物を体系づける朱子学（宋学）の隆盛期であったが、李朱医学はこの宋学の影響を受けて陰陽五行論を人体にも適応させる理論体系であり、さらには医学の古典『黄帝内経』以来説かれる五運六氣（自然の天候や季節の変化と人体を関連付ける学説）を重視する学派であった。田代三喜によつて日本に持ち帰られたこの李朱医学は、その後長く日本の医学の主流を占めることとなる。特にその拡大に大きな役割を果たしたのが、三喜の弟子、曲直瀬道三であった。道三は田代三喜に入門し李朱医学を学んだが、ただ単に李朱医学を学ぶのみにとどまらず、自らの経験をも加え、いわゆる道三派を開くにいたる。江戸時代に入ると道三派の医学はさらにその子曲直瀬玄朔によつて数々書籍化され、近世初期の医学はほぼ道三派の独壇場にあつたといつてよい。またこの頃には出版技術が整い、次々に中国の医学書が輸入され、出版、さらには解説を伴つた和刻本として刊行されたことも、大きく日本の医療に影響を与えた。例えば道三派のバイブルとも言える『黄帝内経』は十七世紀までの間に特に数多くの版が出されており⁽²⁾、『内経』を元流とする五運六氣の働きを重視した道三派の理論が広く受け入れられていたことを示している。もつとも、後には煩瑣な五行の論理を排して中国の古典『傷寒論』を重用した「古方派」が台頭し医療を席卷することとなる。その古方派の人々に対

し、道三派の医学は「後世派（もしくは後世方派）」とも呼称され、江戸時代の医学はこの二流派が主流を占めることとなるのである。しかし古方派の台頭は元隣死後の元禄期以降のことである。以上のような近世前期の医のあり様を考えてみるに、元隣が学んだのは道三を祖とする後世派の医学であつたと考えてよいだろう。

『宝蔵』によれば元隣の師である「春庵」は「啓迪院の高弟」であつたという。この「啓迪院」という号は江戸初期の名医であり、三代將軍家光の侍医としても知られる岡本玄治のことであると考えられるが、この玄治は前出の曲直瀬玄朔の高弟である。玄朔は玄治の優れた資質を見込んで五百人余りの門弟のうち、ただこの玄治のみに奥義を伝えたとされる⁽³⁾。そういった点から考えても、元隣の学んだ医学は当時の主流である道三流、後世派のものであつたと考えられる。

また寛文七年に、元隣は『食物和歌本草増補』という本草書を刊行している。これは和歌の形を借りた本草書の『和歌食物本草』【寛永七（一六三〇）年初版刊】と、『宜禁本草集要歌』（近世初期成立）を抄出し、新たに『本草綱目』『増補日用食性』等の本草書からの引用を付け加えた書である⁽⁴⁾。同書は「而愠斎」の自序を持ち、元隣の著作として知られているが、この内容からも、医師としての必須科目である本草学に親昵し、習熟していた元隣の姿を窺い知ることが出来るだろう。

しかしこれまで、『百物語評判』における医学の影響については検討されてこなかったように思う。作中には、病に関する話題や、それに対しての元隣の評判がみられる章がいくつかある。まずはそれらの記事を当時の医学書と照らし合わせてみることで、元隣がどれほど医学に習熟していたのか、また学んだ医学がどのようなものであつたのかについて検討していきたい。以下、実際に『百物語評判』中にみられる医学的な表現を拾っていきたいと思う。

一、「評判」にみられる医学的知識

『百物語評判』には、病そのものがテーマとなっている章題がいくつかみられる。まずはその中から卷三の二「道陸神の発明の事」を取り上げてみたい。ここでは道祖神の由来が話題の中心となっているが、章段末尾に話題は疫病と瘧に及ぶ。次の箇所は「瘧」の起こる原理について、元隣の加えた「評判」の一部である。

瘧はもと脾胃の虚より生ずる所なり。其れ故に諸病とかはりおこれるにも、其時定り待るは五行の配当に土にして、五常の信にあたり侍れば、其おこれる時節のたがはぬも信なり。勿論其病をうくる所は脾胃なり。病は件の悪気の世上の邪氣にくみして人をなやまし侍るなり。さればにや諸病とかはり、此二病（筆者注……瘧と疫）は医書にもまじなひ侍るなり。

（以下、傍線は筆者）

ここで元隣は「瘧」つまりマラリヤという伝染病について、五行を用いた解説を加えているが、それによれば瘧は脾胃の虚から発生するという。脾胃は五行（木火土金水）に当てはめれば土にあたるが、土が万物の中心にあり常に動かず、五常の「信」に当たることから、この瘧という病も「信」の性質をもち、従ってその流行がいつも一定の時期に発生するのだ、というのがその「評判」の主旨である。ここには五行を重視する李朱医学の影響が強くみられる。この元隣の説が、当時の医学においては定見とでも言うべきものであったことは、次の『万病回春』（一五八七年成立）を見ればわかる。

夫瘧者、因外感風寒暑湿、内傷飲食勞倦、或飢飽色欲過度以致脾胃不和、痰留中脘。然無痰不成瘧。脾胃属土、有信来去、

不失其時。（瘧疾）

瘧が脾胃の不調から発生すること、脾胃が五行の土に属すること、そして何より去来するのに「信」があり、その時を失わない、という表現が元隣の「評判」と一致している。この『万病回春』は明代の医師龔廷賢の著作であるが、前述した金元医学の理論をまとめた著作であり、江戸時代の初期には日本に渡来、慶長十六（一六二一）年の古活字版を嚆矢としてその後も版を重ねている⁽⁵⁾。医師を主人公とした仮名草子『竹斎』（元和七（一六二二）年頃成立）では、竹斎が自らの学問に用いた教本として、

たいせいろん・みやくきやうのうどく うんきろんぢよれい なんきやう くわいしゆんや いがくしやうでん わくぶんに
そもんれいすふ しよ本ざう いりんしうようげん……（以下略）

といった書物の名前を挙げているが、この中にある「くわいしゆん」が『万病回春』のことであろう。『万病回春』が広く流布していたこと、医を志す者にとっては必読の書であったことがここからは読み取れる。『竹斎』作者の富沢道治は曲直瀬玄朔の弟子でもあった。右に挙げたテキストが道三派にとつての基本教本であったということであろう。以上のようなことを考えるに、『万病回春』は当然元隣の読書圏内にも有りえたと思像できる。同書は特に後世派に重用されたテキストでもあった。先に上げた元隣の評判は、『宝蔵』の記述を裏付けられるものであると言えるだろう。

また巻五の一「痘の神疫病の神付斬籙乙の字の事」では、痘瘡がその話題として上がる。元隣は参会者からの「痘の神や疫病神は存在するのか」という問いに対して、以下のようにその知識を披露する。

痘瘡はいにしへはなし。戦国の頃より発りたるよし、医書にみえたり。元人の胎内にやどりしときは、母のふる血を吞みて此生命を長ず、其とこほりし悪血の毒、後々の時の氣にいざなはれて発して疱瘡となれり。されば其根ざしは胎毒なれども、其いざなふ物は時の氣なり。そのあつまれる処則鬼神あり。是れ痘の神なり。

ここでは元隣は痘瘡の原因を、人が胎内にあつたときに飲んだ「母の古血」であるといい、それを「胎毒」と称している。その胎毒が出生後、「時の氣」にいざなわれることで痘瘡が発病するのだ、というのがその主旨であるかと思われる。ここで言う「時の氣」というのは、李朱医学に言う「五運六氣」を指すかと思われる。五運は一年ごとの木火土金水の歳運を、さらに六氣は厥陰・少陰・太陰・少陽・陽明・太陽という季節ごとの氣候の推移による主氣と、さらに年の十二支に従う客氣とを指す。これらの運氣が自然や人体にも影響を与える、というのが運氣論であり、元隣の「時の氣」もこれを指しているといいだろう。また痘瘡の原因を「胎毒」とすることは江戸時代の一般常識であつた。例えば『女重宝記』【元禄五（一六九二）年】のような一般向けの書物にも、胎毒によって「疱瘡くさなどわづらふ事あり」とする一文を見ることができるとなる。

同様の見解は、医学書においても述べられるものであつた。『授蒙聖功方』の巻下「小兒門」には、小兒の痘疹について語つた以下のような箇所がある。

小兒痘疹之患ハ母胎ニアル時胞中ノ穢血ヲノミ其中ニツ、マレテ生下ル時口中ニ含ム所ノ穢血即啼声ノ吸ニ随テ腹中ニヲサマリ下焦ニカクレテアル也。或ハ歳火大過ニシテ熱毒盛ニヲコナハル、時痘毒モヨホサレテ発起スル也。（以下略）

この『授蒙聖功方』は天文十四（一五四五）年に著された曲直瀬道三の著書であり、慶長五年には出版されている。

元隣が道三派の医師であれば当然目にするはずの書である。ここでは元隣が語るよりさらに詳しい胎毒の解説がなされており、胎児が胎内にいる際母の穢血を飲むこと、出生の際に呼吸をすることで腹中にその穢血がおさまること、さらに歳火大過の年にその胎毒が痘瘡となつて発病することが書かれているが、この理論は大筋で元隣の言うものと同じであろう。

また、元隣の「評判」引用箇所前半にみられる「痘瘡はいにしへはなし。戦国の頃より発りたるよし、医書にみえたり」の内容に関しては、『百物語評判』と同年の貞享三（一六八六）年に刊行された『病名彙解』に同様の記述がみられる。

痘疹心卯ニ曰上古ノ時イマタ痘瘡ノ症ヲキカズ。素難ノ文モコレニ及フアルモノ鮮シ。東漢建武中ニ南陽虜ヲ撃ヨリツイニ其毒ニ染テ中国ニ流布ス故ニコレヲ虜瘡トイヘリ。或ハ曰聖瘡言フ心ハソノ変化測ナケレバ也。或ハ曰天瘡言フ心ハ天行疫癘トスレバナリ。……（中略）……○本草綱目ニハ高宗ノ永徽四年ニ此瘡西域ヨリ中国ニウツリ来ルト云リ。吾カ日本ニモ亦古ヘ此病ナシ。人皇四十五代聖武天皇ノ御宇ニ天下ニ疱瘡ノ説アリ。

（「痘瘡」の部より引用）

ここには疾病史における痘瘡の発生時期が数説載せられているが、いずれも元隣の言う「戦国の頃」とは一致しないようである。ただし「痘瘡いにしへはなし」という大まかな論旨に逆らうものではないと言える。

この『病名彙解』は元隣と同時代に活躍した医師蘆川桂州による病名辞典である。いろは順に病名を並べ、それぞれに解説が付されているが、そこで引用される書物は『素問』『医学入門』『万病回春』『医学綱目』等、大部分が後世派が重用して教科としたものである。安西安周氏はこのことから、「彼が後世派の医人たることは、これによって断定することができるのである」としている⁽⁶⁾。医師として活躍した年代が近いこと（桂州はその著作物の刊行年代から

貞享・元禄期の人とされる）、そして学んだ流派が同じであることから、元隣が修得した医学もこの『病名彙解』に近いものであっただろうと想像できる。後世派の医師における痘瘡についての共通認識が、元隣の評判の中にそのまま表れていると考えてもよいだろう。

『百物語評判』における元隣の医学知識の披露はこれだけにとどまらない。巻五の七「夢物がたりの事」では、「夢」がその組上に上がる。ここで元隣が取り上げるのは心身の状態がそのまま夢に現れる「病夢」である。

たとへば心の火虚したる人は、水を夢み、腎の水虚したる人は火を夢みなどするを病夢といふ。又其のかたちのふる、事に付きて見る事あり。足を重ねて横に臥したるとき、其の足うへより落つれば、必ず高き処より落ちたると思ふ事あり。是れまた病夢の類なるべし。

ここで元隣は体の状態が夢へ与える影響を説く。体内の心火が衰えればすなわち夢に水を見、また腎水が少なければ火を夢見る、というのである。先にも述べた通り、李朱医学において五臓はそれぞれ五行の木火土金水にあてはめられる。木に相当するのが肝であり、火が心、土が脾、金が肺、水が腎をそれぞれつかさどるが、「心の火」「腎の水」という元隣の言葉は、元隣がこの論理を心得ていたことを示している。この夢と陰陽の過不足との関係は、道三派が重視した中国の古典『黄帝内経素問』『脈要精微論篇』に見られる、

陰盛則夢涉大水恐懼、陽盛則夢大火燔灼。

とおそらく同義であろう。『素問』は言うまでもなく中医学の古典であり、特に後世派にとってはその医論の根柢と

もなる理論書であった。先に挙げた『竹齋』にも、当然「そもん」とその名が見られる。また同様の理論は『延寿院切紙』にも、

腎陽虚スレハ大水ヲユメミルナリ

と見出すことができる。同書は曲直瀬玄朔の手による書であり、「道三切紙ヲ祖述セルモノニシテ、コレヲ当流ノ秘伝トシテ門下ニ示セルナリ」⁽⁷⁾というものであるから、これもまた元隣の学んだ医学が後世派のものであり、また元隣がその五行論を我がものとしていたことの表れであるかと思う。

右に確認してきた通り、元隣の評判には医学的知識が散見できるのであり、さらにその知識は当時の医学に即したものであったと言える。特に病理については、道三派の理論、もしくは道三派が依拠した李朱医学を確実に踏襲していることが確認でき、『宝蔵』にある、元隣が岡本玄治の孫弟子であった、という記述も信憑性のあるものとして見てよいかと考えられる。またこれらの記述からは、元隣が簡便な医学書にばかり頼った「庸医」ではなく、医学論理を我がものとして身に着けていたことも垣間見えるのである。

二、怪異分析への医学の援用

病に関する評判に、元隣の医学的知識が用いられていること、さらにその知識が付け刃のものではないことは右で確認した。では、それ以外の話題、例えば怪異の分析にも、医学的知識が用いられている、ということはないものだろうか。

一例として、まずは巻四第七「雪女の事并雪の説」を見ていきたい。以下、参会者からの「雪は元、雨にて待るに白きはいかなる道理にて候ふや」という質問に答えての元隣の言葉である。

「さて雨露のむすほはりて白くなる理は、凡そ世界の物のかたまる事、皆五行に配当して金氣のつかさどる処なり。金の色はもつとも五色も候へども、白きが則ち西方のたゞしき色なり。此故に雨露もこりかたまりては、かならず金の色をあらはして白くなり侍る。況んや大空は金氣清明の氣のつかさどるなれば、雨露のうちに其色をふくみてこりかたまりて降るものなるをや」。又問ふ、「しからば堅くこれる物は皆白くなり候ふや。」いはく、「大かたしらく侍る。生類の骨は白く、草木の根は白く、潮を煮かたむればしらく、土のかたまれる砂はしらく侍らずや」と語られき。

ここで元隣は参会者の「雪は元々雨であるのに、なぜ白いのか」という問いに対し、五行の金行の解説から評判を始める。なんとなれば、「固まる」「白い」という性質はどちらも金を持つ要素だからであり、そのため「堅いもの」は一般に白い色をしており、よって雨が固まった雪も白くなるのだ、というのがその論旨である。すでに述べた通り、五行の特質を重要視することは後世派の医学の特質である。『素問』卷一「金匱真言論四」には

西方白色、入通於肺、開竅於鼻、藏精於肺。故病在背。其味辛、其類金、其畜馬、其穀稻。其応四時、上為太白星。是以知病之在皮毛也。其音商、其数九、其臭腥。

との記述がみられるが、おそらく元隣の論拠となったものも、このような医学書に見られる五行論であったかと考えられる。『素問』の註釈書である『類経』（卷三「五藏之応各有収受」）には、「其穀稻」の解説として「稻ハ堅シテ而白シ。故ニ金ニ属ス」との記述がみられる。これなどは元隣の言う、凝り固まった物は「大かたしらく侍る」という論

と同じ展開であると言えるだろう。この『類経』もまた、後世派に重く用いられた教本である。明の張介賓の撰であり、成立は一六二四年。『黄帝内経素問』ならびに『黄帝内経靈樞』の二書を解体し内容ごとに再編成を行って、新たに註を加えている。日本においても成立直後に輸入され、『黄帝内経』の入門書として広く流布した⁽⁸⁾。白いものは大方堅い、といういかにも非科学的な論は、実はこのような医書に依拠していたのではなかっただろうか。

医学を元としたと思われる評判は他にもある。例えば『百物語評判』巻二の一「狐の沙汰付百丈禪師の事」において次のような評判を行う。

世に狐つきといふものあり。(略)内虚する時は、外邪そのひまをうかがふ道理なれば、人の喜怒哀楽の七情ひとつにても過ぎて、心の主人外にはなる、か、又はその過分にうつけたる者には、其隙をうかがひて狐のをそふなるべし。されば本心のたゞしき人は、千歳の狐もたぶらかす事なし。

狐が人を化かす、という怪異について尋ねられた元隣は、中国の書物にも事例がみられることから狐が化けるという事は実際にあり得るのだ、とその怪異自体を肯定する。しかし狐に付け入られるのは「七情」に振り回され心に隙のある人間だけであり、正しい心持でいればいかな狐とてその人を化かすことはできない、と一座の人間に訓戒をする。これはいかにも仮名草子的な、啓蒙を目的とした箇所とも読めるし、また事実そうであろうが、同時に医学的な見地からも書かれたものであるようだ。そもそも元隣がここで用いた「外邪」「七情」という言葉が医学用語なのである。

貝原益軒は『養生訓』において、七情を「喜・怒・哀・楽・愛・悪・慾也。医家にては喜・怒・憂・思・悲・恐・驚と云。」(巻二「総論」)と説明する。この七情が行き過ぎれば体内の不調和をもたらすこととなる。元隣の言う「内

虚する」とはこの状態を指す。この体内の不調和に外からの刺激、つまり「外邪」が加われば人は疾病の症状が発現する。この「外邪」とは風・寒・暑・湿・燥・火の六つの気候因子を指し「六淫」とも称する。『増補師語録』〔曲直瀬道三著、貞享二年（一六八五）刊〕に、

内七情ヲ動ゼズ外六淫ニ感ゼズンハ其氣何病ト云コトカアラン（十、「氣」）

とある通り、東洋医学においては内邪と併せてこれらの二つを主な病因とみなしたようである。もともと、根源的な病の原因は「内邪」であった。外邪は単に自然界の刺激であり、内因によって体内の変調をきたした時に初めて疾病の原因と為り得る。『黄帝内経』にすでに見られるこの考え方を、丸山敏秋氏は「体内が正常で精気に満ちていれば、たとえ気候の変調などの外因があろうとも疾病は生じない」と解説するが⁽⁹⁾、元隣の評判がこの考えにのっとって為されたことは明らかであろう。ただし、元隣の論は本来気候による刺激であるはずの「外邪」に、妖狐を置き変えたところに飛躍がある。しかしこの飛躍も元隣一人に特異なものではない。『万病回春』の「邪祟門」に以下の記述が見られる。

丹溪曰、俗云衝惡者、謂衝斥邪惡鬼崇而病也。如此病者、未有不因氣血先虧而致者焉。血氣者心之神也。神既衰乏、邪因而入理或有之。按此恐指山谷狐魅而言。

編者の龔廷賢は、血氣が衰えれば体内に「邪」が入るのだ、という丹溪の説を引き、その「邪」が「山谷狐魅」の事を指すのではないかと注を施している。ここでは疾病一般の論理をいわゆる狐狸の「憑物」にまで適応することによ

り、憑物という怪異を医学の論理下に置くことを試みていと言え。この解釈によつて「憑物」は医学の範疇に収まることとなる。さらにこの箇所は道三派のテキストである『啓迪集』（巻五「中恵門」）や、後世派の医師である蘆川桂州の『病名彙解』にも引用されている。狐の妖が、人の身体の際に付け入るといふのは、後世派の医師にとつて広く認知された事柄であつたということが言えるだろう。元隣が狐を「外邪」と位置付けたにはこのようなバックグラウンドがあつてのことと思われる。

また元隣の評判にきわめて近い論旨が、次の『医学正伝』に見ることができる。

或問、山居野処之地、狸魅之患有リト云。誠ニ此有ヤ否カ。曰ク。妖祟ノ患ヲ為ス、古ヘ自リ之有リ。独リ老狐ノ成精ノミ
ニ非ズ、人家ノ猫犬ニ至マデ亦善ク妖ヲ為ス者有リ。大抵其ノ惑ヲ被ル者ハ皆性淫ニシテ而氣血虚スル者也。故ニ邪虚ニ乗シ
テ入ルノミ。未ダ正人君子血氣充実ノ者ノ、其ノ惑ヲ被ムル事有ラズ。
(卷一 医学或問凡五十一条)

ここからは狐狸の妖までもが医学の領分としてとらえられていたことが分かるし、さらには狐による妖異の存在を肯定しつつ、一方でその害は心に隙のない君子ならば被ることがない、とする論旨など、元隣の「評判」とほぼ同義であると言える。加えて、傍線の箇所は、巻二第二「狸」、巻四第二「河太郎」、巻四第八「猫また」、巻五第四「竜宮城」に見られる「其劫経たる、いかでか人をまよはざらん」「河瀬の劫を経たるなるべし」「ねこまたとハ其経あがりたる名なり」「もし其年を経たるものあらば、たま／＼人にも変化すまじきにあらねど」といった評の根拠となつたのではないか。直接この書に元隣が拠つたか否かは別として、このような論理が医学の場で一般に受け入れられていたであろうことは想像に難くないのである。なお右に引いた『医学正伝』は、先に挙げた『竹斎』の中にも「いがくしやうでん」とその書名を見ることが出来る。同書は明の虞搏の撰による医学全書であり、中国では一五七七年に

刊行された。日本においては慶長二（一五九七）年の古活字版を始め多くの版を重ねた道三派の教書である。元隣が直接この書を参考にしたということも考えられるであろう。このように、元隣の評判において、怪異を判ずるにあたって医学の援用が行われているのである。

三、医師による怪異譚

こゝまで元隣の「評判」と、元隣の読書圈にあったと思われる医書や、もしくは元隣の同時代人の医師による医書とを直接比較してきた。その結果「評判」に医学の論理が多用されていることが明らかになった。しかし、こうした医学による怪異の分析は元隣に特有のものであったのかと言えば、それも必ずしもそうとは言えない。ここからは、『百物語評判』と同じく、近世の医師によつて書かれた随筆及び医学書に着目して、それらとの比較の中から同作の「評判」が占める位置を検討してみたい。

「百物語評判」会においては、「評判」を加えるだけでなく、元隣自身もまた怪談を提供する語り手の一人となる。卷一第七「犬神四国にある事」において、元隣が自ら口火を切つて語り出したのは、四国に伝わる「犬神」の怪異である。以下、長いが元隣の評判の全文を引用する。

四国に犬神といふ物あり。此犬神を家に受領したる人を犬神持ちと云ひて、今の世にもまゝあることなり。たとへば此犬神持ち、友達などの処へ行きかゝりける折から、その友の家に美食珍酒など侍るを見る事ありて、其物につゆばかりもとかく心うつり侍る時は、其友かならず寒熱の煩をなして、そゞろ事には、彼の思ひし飲食の事などいひ罵れり。然る処に病者の家人、彼の犬神持ちたる人にかくと云ひしらするか、又は隔心なる中にていひ出す事もなりがたければ、覓山伏など呼びて祓させる時、其病いゆるとかや云へり。かゝるうるさき事なれば、其犬神持ちの家とはかねて遠ざかり、婚姻などは曾て結ぶ事な

し。其れ故、身もさがなき事にして、あきはて悲しめども、先祖より伝はり来たれる邪神なればせんかたなく、身をうらみかなしめりとかな。其始めをかたり伝ふるを聞けば、ひとつの犬を柱につなぎ、其繩をすこしゆるめて、器に食物をもり、其犬の口のさきの既にとゞかんとする処に置きて、うへ殺しにして、其霊をまつり納めてなす事なりと云へり。もろこしの蠱毒の類なり。しかしながら今の世は、たまぐ犬神持ちたる人も、いかにしてか此神のことかたへも行かむ事を願へば、まして今更なす者あるべからず。是れ名字をも知らず、無仏世界の時の事なるべし。猶此犬神王城の人につく事あらずと云へり。

ここで元隣は犬神が四国に分布していることや犬神の起こり（餓え殺しにする）、他人に犬神が憑く契機や憑かれた人のあり様、その落し方や犬神筋の婚姻における不利までをも詳細に、伝聞として語る。さらには犬神にたいする分析として、犬神を「もろこしの蠱毒の類」であると断じている。蠱毒とは虫を用いた呪術を指し、『本草綱目』（卷四十二 蟲之四「蠱蟲」）には「以百蟲置皿中、俾相啖食、取其存者、為蠱」とその由来が述べられている。『病名彙解』はさらにそれを人の飲食にまぎれさせ飲ませれば、相手が死亡するということを記している。犬神との共通点は残酷な殺し方をする事で動物を呪物に変えるという点であろうか。そしてもう一つ、この怪異に対する分析として、元隣は「王城の人につく事あらず」という結論を与えている。一見論理性に乏しく思えるこの評判であるが、しかしこの論理が、元隣に独自の論理であったかどうか、今少し考察を加えたい。またこの元隣の発言は全体に伝聞の形を以て語られる。それは怪談の常とはいいながら、では一体この話をどのような経緯で入手したのか。

『百物語評判』の他にも、犬神について載せる書がいくつか存在する。それらとの比較のから、右の問題を考察していきたい。まずは元隣と同じく医師であった黒川道佑による随筆『遠碧軒記』【宝暦六（一七五六）年】を挙げる。同書は犬神について、『百物語評判』によく似た次のような見解を載せる。

田舎にある犬神と云事は、其人先代に犬を生ながら土中に埋て咒を誦してをけば、其人子孫まで人をにくきと思ふとその犬の念その人につき煩ふなり。それをしりてわび言をして犬を祭れば忽癒。くちなはも右のごとくにす、それはとうしんといふ。田舎西国辺にては今にもある事なり。

(下之二)

元隣言う「犬を餓え殺しにする」という過程はここには述べられないものの、末文の「田舎西国にては」今もあることである、という結びは、『百物語評判』の「犬神王城の人につくことあらず」の主張と一致していると考えてよいだろう。また同じく医師の手による医療随筆『杏林内省録』【天保七（一八三六）年成立】巻之六は、元隣の評判にほぼ等しい犬神の知識を披露する。

土州有犬蠱、雲州有狐蠱、皆甚害人、犬蠱者、厥初有人、繫犬而不与食、候其飢極、設飯及魚肉於前、犬見之急延頸、将就之而不及也、於是人抽刀到之、取其首而祠之、以為犬蠱、遂歲時祭之行犬蠱者、若有怨於人、及見人家所有貨財、而心僅欲之、其人即病、医藥不効、病家必尋其蠱主、就而謝罪、及問其所欲、而与之則已、……（中略）……伝聞犬蠱ノ所為モ、皇都ヲ去ル事三十里ノ外ナラデハ不能魅ナリ。

犬を餓えさせて殺すと云う犬神の起りや、また崇りにあつた際の対応の仕方などは、ほとんど元隣の説にそのままだと言つてよい。さらに「皇都ヲ去ル事三十里ノ外ナラデハ不能魅ナリ」は当然、元隣のいう「犬神王城の人につくことあらず」と同義である。また重ねて言えば、この『杏林内省録』が「医師に向けて」書かれた随筆であるということも特筆すべきであろう。同書は、岡山藩医緒方維勝が藩医・町医・里医それぞれへの心得を記した医療随筆であるが、里医に対しての内容は、

村里ニ住スル医ハ万端愚民ヲ指導シテ広ク藥ヲ鬻ノ術ヲ紀シ、夜盜妖巫ノ輩ニ遇タル時ノ処置及狐狸鬼魅犬蠱等ニ憑レタル病人ノ治法ヲ挙グ。

と本人がその首で記しており、これはつまり「狐狸鬼魅犬蠱」までもが医療の領分であつたことを示している。犬神に憑かれた人間が体の不調をきたすということであるから、それは当然のことであらう。また維勝がこれらの話題を提示するのは「里医」に向けての部だけであり、藩医、町医に対しては右記の話題は示されない。つまり「狐狸鬼魅犬蠱」への対応が必要とされたのが僻地に住む「里医」だけであつた、ということである。これは元隣の言う「犬神王城の人につくことあらず」と同様の考えに基づくと言つていいだろう。さらに加えて、「犬蠱」という表現も、元隣の犬神を「もろこしの蠱毒の類なり」とする見解を一意にすることの表れかと思われる。同様の例は他にも散見できる。前述の『病名彙解』巻五「蠱毒」では、蠱毒数種の説明を引用した後「按ニ日本四国ニ犬神ト称スル類カ」との割註が見られる。『牛山活套』巻之中「邪祟」にも「犬神ト云ハ犬ヲ殺シテ邪ヲコシラヘタルヲ云。唐土ノ蠱毒ノ類ノ如キ者カ」との一文を見ることが出来る。以上のことから明らかなように、元隣の評判もまた、これら医師の間で語られる「犬神」の通説を、そのまま踏襲したものであつたと考えられるのである。そしてさらに想像するならば、元隣の語る「犬神」の怪異譚そのものの出所もまた、医師の間のネットワークだったのではないか。

その想像の一助として、中山三柳の『醍醐随筆』を挙げたい。同書には、同じく犬神を話題にする箇所が見られるのである。

四国あたりに犬神といふ事有。犬神をもちたる人たれにてもにくしと思へば、件の犬神たちまちつきて心身悩乱して病をう

け、もしは死すると云ふ。いかなる道理と思へば、まづ其国の人、犬神といふ事をつねに聞かれておそろしく思ふ故、外感風邪山嵐瘴氣の病の熱はなはだしく、身心くるしき時は例の犬神よと、病人も病家もおもふ故に犬神の事のみ口はしりの、しるを、さればこそとさはぎ物して、山ぶしやうのものの数々むかへていのり聞ふれば、あらぬ事のいいひこしらへて、させる事なき病者も死する人おほしと彼国にすみける、くすしのかたりけるは、むべも有なんとおぼふ。中国西国のあたりに蛇神をもちて、人につけなやますとやらん、又犬神とおなじかるべし。

『醍醐隨筆』（下巻）

ここで三柳の語る「犬神」は元隣語るものとは若干の隔たりがある。元隣が例に拠つて犬神の存在を肯定しているのに対し、三柳は「犬神」を信じる共同体にその原因を求め、怪異としての「犬神」を否定している。元隣の評判と比すればよほど科学的な分析ではある。ただしここでは評言そのものではなく、傍線の一文に注目したい。線で示した通り、三柳はこの話の出所を「彼国にすみける、くすしのかたりける」と明示している。ここでは地方の怪異譚の伝達にあたつて、くすし、医師のネットワークが存在することが示されているわけである。元隣の「咄」の出所も、このようなネットワークに連なることでもたらされたものではなかったか。

元隣が近世初期の名医、岡本玄治の孫弟子であり、曲直瀬道三の流れを受けた道三流の医を学んだことはすでに述べたが、この中山三柳もまた、道三流の医師であつた。三柳の師は前述の曲直瀬玄朔の高弟長沢道寿であり、つまり三柳は元隣と同じく曲直瀬玄朔の孫弟子であつたことになる。間接的にはあれ、両者が知識を共有できる立場にあつたということが言えるであらう。

犬神について載せる書はそもそもそう多くはない。その寡少なうちの大部分が医師の手によるものだ、ということには注目すべき点であらう。さらにそれを「蠱毒」の類であるとし、また都の人間には憑かない、とする二つの分析がいずれも一致しているということから考えるに、犬神の怪異が伝播する上で、医者役割は大きかったと考えられ

る。百物語の場において、「大神」の怪異を、元隣自らが語り出したこともこの点から納得がいくのである。

その源を「医の場」に求められる話は他にも見受けられる。誌面の都合上詳細は割愛するが、巻二「幽霊の事付姑獲鳥の事」で取り上げられる姑獲鳥、巻一「絶岸和尚肥後にて轆轤首見給ひし事」で語られる飛頭蛮、巻四「痘の神疫病の神付簞籬乙の字の事」に登場する「簞籬乙」の説話が、いずれも医学書の中に見られる話題であることを指摘しておきたいと思う⁽⁴⁰⁾。

同じ話題が、同じ解釈、分析、位置づけでもって語られているということは、それぞれの知識源が一致しているか、もしくは同一の系譜に属するものであったということであろう。話の題材を得るにあたっても、医師としてのネットワーク、もしくは医学を学ぶ場においての経験が作用しているのではないだろうか。またそこでは怪異譚だけではなく、それにしたがる科学的な分析もセットとなつて提供されたものと考えられる。ここではいわば、怪異を説く上で「定型」を用いる元隣の姿が見えるのである。

仮名草子がしばしば医学を素材とすることは言うまでもない。花田富二夫氏は、仮名草子と医学の接点として、医学の伝統的継承の場を指摘されている⁽⁴¹⁾。元隣にとつての「場」が、春庵との医学修行の場であつたことが想像できるのである。

おわりに

ここまでの内容を振り返りたい。まず一章で確認した通り、『百物語評判』には病について触れた話が数章ある。その中で元隣は自らの医学的知識を披露しているが、これらの説はどれも後世派の医論に沿うものであつた。『宝蔵』の後序に見られる通り、元隣が曲直瀬道三の門下に属する後世派の医学を学んだ可能性が高いことをここで確認し

た。二章では、病以外の怪異に対する評判、主に狐の事例を取り上げ、そこでも元隣が「評判」に医学の論理を援用していることを検討した。三章では、『百物語評判』と、医書や同じく医師によって著された随筆数書との比較を行った。結果、両者の間には取り上げる話柄やそれに対する解釈の一致が多くみられたことから、話題の提示とその分析が、一つの定型となつて医師の間で語られていたのではないかと推測した。元隣の評判もまた、そのような医師に拠る怪異分析の系譜に連なるものではなかったか、というのが結論である。

右の点から考えるに、医の論理をそのまま摂取した元隣の評判は、独自性という点においてはそれほど大きな評価を与えるわけにはいかないだろう。しかし、『百物語評判』に特筆するべき点は、むしろそれまで一部の識者の間のみで共有されていたそれらの知識を、一般に分かりやすい娯楽的な読み物にした点にあるかと思われる。『百物語評判』が怪異小説集であると同時に、啓蒙書でもあったことが、医学知識の点においても言えるのではないだろうか。それを可能にしたのが医師としての元隣の経験と学識であった。医学が『百物語評判』に及ぼした影響は大きいものであった、ということを本稿の結論としたい。

※なお、『授蒙聖功方』『延寿院切紙』『増補師語録』の三書は、京都大学附属図書館所蔵の和本を翻刻の上引用した。掲載を許可して下さった京都大学附属図書館に深くお礼申し上げます。

註(1) 榎坂浩尚「山岡元隣―季吟との関係を中心に―」『北村季吟論考』（新典社 一九九六・一）

(2) 真柳誠「江戸期渡来の中国医書とその和刻」『歴史の中の病と医学』（思文閣出版 一九九七・三）に拠る。

(3) 酒井シヅ『日本の医療史』（東京書籍株式会社・一九八二・九）第一章「近世の医療」に拠る。

(4) 板谷麗子・亀谷京子・江原絢子「和歌食物本草について 翻刻と校異」『東京家政学院大学紀要 一四』

(5) 萩田守編『図説東洋医学 用語編』（学習研究社 一九八八・一〇）

- (6) 安西安周『日本儒医研究』第三章「蘆川桂州」(龍吟社 一九四三・五)
- (7) 富士川游『日本医学史』第八章「江戸時代ノ医学・初世 医師」(日新書院 一九四一・四)
- (8) (5)に同じ。
- (9) 丸山敏秋「(内経医学)の大意」『黄帝内経と中国古代医学』その形成と思想的背景および特質』第四章(一九八八・二 東京美術)
- (10) 『病原候論』卷四十八「無辜病候」、「備急千金要方」卷十一「少小嬰孺方」には、いずれも「姑獲」及び「無辜」(姑獲の別名)が子供の「痢」を引き起こす鳥として紹介されている。その記述内容は元隣の評判に近い。また『病名彙解』巻七には、「飛頭蚤」という名で、輾轡首の症状が紹介されている。同書は飛頭蚤の解説として様々な中国の文献からの引用を載せるが、その中の多くが、元隣の評判中に用いられる引き書と一致している。さらに、『病名彙解』巻七「疫癘」では、疫病避けの札「蘄癘乙」の由来として、元隣が評判中で紹介するのと同じ説話を掲載している。
- (11) 花田富二夫「仮名草子と医学との接点―その「場」を中心に」『文学』八卷三三号(二〇〇七・五)

【使用テキスト】

- 『百物語評判』太刀川清校訂『叢書江戸文庫 続百物語怪談集成』(国書刊行会 一九九三年)
- 『宝蔵』山岡元隣著『寶蔵』(明治書院・一九三二年)
- 『万病回春』『和刻漢籍医書集成 第十一輯 万病回春』(北里研究所附属東洋医学総合研究所医史文献研究室編、エンタブラ イズ・一九九一)
- 『竹斎』守随憲治校訂『竹斎』岩波書店・一九八八年)
- 『授蒙聖功方』京都大学附属図書館所蔵富士川文庫
- 『類経』『四庫全書 七七六冊』臺灣商務印書館
- 『病名彙解』大塚敬、矢数道明任編集『近世漢方医学書集成 六』(名著出版・一九八二)
- 『黄帝内経素問』『四庫全書 七三三冊』臺灣商務印書館
- 『延寿院切紙』京都大学附属図書館所蔵富士川文庫

『増補師語録』京都大学附属図書館所蔵富土川文庫

『杏林内省録』森銑三監修『続日本随筆大成第十卷』（吉川弘文館・一九八〇・十二）

『遠碧軒記』日本随筆大成編輯部編『日本随筆大成 卷五』（吉川弘文館・一九二七・八）

『醒醐随筆』森銑三監修『続日本随筆大成第十卷』（吉川弘文館・一九八〇・十二）

『医学正伝』北里研究所附属東洋医学総合研究所医史文献研究室編『和刻漢籍医書集成 第八輯 医学正伝』（エンタプライズ・一九九〇）

『牛山活套』大塚敬節、矢数道明編『近世漢方医書集成六一 香月牛山』（名著出版・一九八〇・一〇）

『養生訓』石川謙校訂『養生訓・和俗童子訓』（ワイド版岩波文庫32・岩波書店・一九九一・六）

（てら けいこ・関西学院大学文学研究科研究員）